

「伝わるように伝える」教育実践の開発 —在日ブラジル人学校におけるフレンドシップ事業履修生の体験から—

結 城 恵

群馬大学教育学部附属学校教育臨床総合センター

Development of “in order to be transmitted, it conveys” educational practice —The Friendship Project students’ experience in a Brazilian school—

Megumi YUKI

Center for Cooperative Research and School Education, Faculty of Education, Gunma University

キーワード：教員養成、フレンドシップ事業、多文化共生

Key words : Teacher training, Friendship Project, multicultural education

(2011年10月31日受理)

学校教育場面において、児童生徒に教育内容を理解させることは、教員の重要な使命のひとつである。ある教育内容を児童生徒に「どう理解させる」かは、教育実践研究及び教員養成研究の中核的な課題であり、膨大な知見が蓄積されてきた。

これに対して本稿は、ある教育内容を児童生徒に理解させるための前提となる行為として、「どう伝えるか」に焦点をあてる。ある実験的な教育実践の記述をもとに、児童生徒に「伝わるように伝える」実践に求められる創意工夫を検討し、それをもとに教員養成のあり方を考察する。

1. 「伝わるように伝える」教育実践

本稿が課題に設定した相手に「伝わるように伝える」ことをテーマとした研究については、主として授業におけるコミュニケーションの実態分析に関する研究が挙げられる。具体的には、協同学習の場が子ども同士のコミュニケーションの質に与える影響に関する研究（土江2011, 松浦・近藤2011, 神戸大学附属住吉中学校2009, 大黒・稲垣2006, 杉江2006等）、対人コミュ

ニケーションの実態やコミュニケーション技能を開発する実践研究（小川2010, 橋本1999）が報告されている。

「伝わるように伝える」ことの実態は、これらの研究にも示されるように、学習者間に焦点が当てられてきた。しかし、教育者—学習者間に焦点を当てたものは、ほとんど蓄積されていない。確かに、教育者—学習者間のコミュニケーションの実態研究より、ジャクソン（Jackson 1968）はヒドゥン・カリキュラムの存在を、バーンステイン（Bernstein 1974）は教育コードの存在を浮き彫りにした。文化的・社会的文脈のなかで教育実践をとらえ直す教育実践研究が蓄積している（松下2000, 佐藤1996, 長尾1995等）。一方、授業で教師が子どもたちに対して伝わるように伝えているか、という点について、検証し有効な方法を開発する研究は課題となっている。

教師の指示・伝達が、子どもたちに対して伝わらない実態があるとすれば、大別して次の3つの場面が想定されよう。第一に、教師の指示・伝達が文脈依存的である場合。教師の指示・伝達で何が要求されているのかの意味を、児童生徒が推察して行動することが要

求される。したがって、その指示・伝達の文脈が読めない児童生徒には、教師が伝えることが伝わらない。第二に、教師が子どもの理解の枠組みに即して伝える意識を持たず、子どもたちもそれを受け流している場合。教師は、子どもに対して伝えつつもりになっているが、実際には子どもたちはその意を理解していない。第三に、教師が子どもに伝えるべきことを伝えていない場合。教師が、子どもに対して伝える内容を十分な吟味しておらず、内容の一部が剥落している。

本稿は、上述した状況が教育実践の中で生まれやすいことを自覚し、これに対応できる教員の養成を行うという視点で、次のような実践の設定を行った。教育学部の学生に、在日ブラジル人学校の子どもたちを対象とする健康啓発活動を企画・実施させる。体組成計で自分の健康状態を把握し、健康の維持管理の目安と栄養摂取の方法を、小学校高学年～中学生相当年齢の子どもたちに「伝わるように伝える」。その実践結果をもとに、子どもたちに「伝わるように伝える」教育実践のあり方を検討する。

この教育実践に取り組んだ学生は、本学教育学部体験的科目「教師とともに創る多文化共生教育実践」「多文化共生教育実践プロジェクト演習」を履修する8名である。これらの学生がチームとなって、在日ブラジル人学校の協力を得て、健康啓発活動を展開する。メンバーは、群馬県生まれ・育ちの学生7名と、ブラジル・サンパウロからの留学生1名である。実施期間は、平成21年10月～平成22年7月である。

これらの学生は、自身でも体組成計の使用は初めてであり、健康の維持管理について他者に説明できるほどの知識も経験もない。一方の、在日ブラジル人学校の児童生徒も同様の状況にある。さらに、本実践を行

う在日ブラジル人学校は、使用言語はポルトガル語である。学校保健安全法の対象とはなっていない、いわゆる私塾であり、学校での健康診断等は義務づけられておらず、健康管理は専ら家庭の責任となっている。そのような状況の中で行う本実践で学生たちに求められるのは、子どもたちに「伝わるように伝える」ことに他ならない。

なお、本実践に取り組む前に、学生たちは、在日ブラジル人学校を対象とした健康診断及び体力測定プロジェクトに参加している。このプロジェクトは、文部科学省の委託を受け、平成21年11～12月に本学教育学部と医学部との連携で実施した(結城2010)。健康診断プロジェクトでは、学校保健法に基づく検査項目に準じて、問診、身長・体重・座高計測、尿検査、視力検査、聴力検査(選択)、医師診察を行った。体力測定プロジェクトでは、体力測定を実施し、その評価をもとに健康づくりプログラムを作成した。日常の生活スタイル調査・生活スタイル評価は、アンケート以外にライフコーダー(歩数計)を活用し、日常の活動量等を調査することによって把握した。また、活動的な生活スタイルを支援する意味において運動の楽しみ方や仲間づくりへの支援を行い、日常生活に運動をより多く取り入れることの方策を検討した。

これらのプロジェクトの知見をもとに、その後も学校や家庭でできる健康維持・向上のための取組を促す健康啓発を行うことが、学生に与えられた課題である。学生は在日ブラジル人学校向けの教材を開発し、学校を巡回しながら健康啓発を行った。また、2009年から2010年にかけてインフルエンザが流行したことを踏まえて、インフルエンザの予防法に関する啓発も行うこととなった。留学生を交えて学生が話し合いをした

健康診断



体力測定



結果、ブラジルの学校では、マスクをつける習慣がないこと、手洗い・うがいを指導する機会がないことが判明した。つまり、学生たちには、知識経験のない子どもにも「伝わるように伝える」工夫も必要となる。

2. 「伝わるように伝える」ために一試行錯誤の軌跡

ここでは、学生たちの健康啓発の実践記録を紹介する。学生が企画したのは、主として（1）体組成計による計測と栄養摂取の記録ノートの作成、（2）栄養バランスに関する啓発パンフレットの作成、（3）健康啓発イベントの実施である。以下の記録には、その事前事後の取組もあわせて報告されている^(註)。

プロジェクトの準備段階において、まず子どもたちに家族とともに健康について考えてもらえるように、パンフレットを作成した。学生自らが、パンフレットの構成や内容を検討した。まず、日本の小学校の低学年から高学年までの保健や家庭科の教科書を参考にして、パンフレットに載せる絵や説明文を作成した。子どもにわかるように説明文や絵を考えることがとても難しく、話し合いを重ね何度も推敲していった。パンフレットは日本語で書かれたものをポルトガル語に翻訳した。日本語からポルトガル語に翻訳する場合、いくつかの課題があることに気づいた。例えば、ポルトガル語は日本語より文章が長くなってしまふ。パンフレットの説明として載せるにあたって絵やグラフがずれたりしないように工夫する必要があった。また、「体組成計」をそのまま翻訳しても、子どもたちには伝わらない。そこで、ここでは、「スーパー体重計」の意味

に訳した。また、日本では「ローレル指数」と「BMI」を年齢によって使い分けられるが、ブラジルでは区別しないので、「BMI」と訳すことにした。

健康記録ノートも同時に学生が作成した。これは、測定した結果を書きこむためのノートで、毎日十分な睡眠がとれたか、食事ではどの食品群が摂れたか、などの項目にシールを貼っていくページも作成した。この冊子が完成するまでに、子どもたちが記録の仕方を理解して、意欲的に取り組めるようにどうしたらよいか、話し合いを重ね何度も改変した。記録ノートでは表やグラフの記録の仕方がわかるように、具体的な人物の名前を使って具体例を提示することで、児童が視覚的に書き方について理解できるように工夫した。記録ノートの中の毎日達成できた健康に関する項目にシールを貼ってチェックするグラフでは、花が段階ごとに成長していく絵を載せることで、子どもたちが毎日シールを貼れるように頑張ろうとする意欲をもてる工夫をした。

キリンの身長計も学生が手作りする。子どもたちが意欲的に取り組めるよう可愛いキリンのデザインにしたもので高さは2メートルある。これは外国人学校が幼稚部から高等部まで幅広い年代で構成されているという実態に基づき背の高い子どもでも測れるように配慮した。この身長計は本プロジェクトで巡回した学校全てに配置し、日常的に測れるようにした。

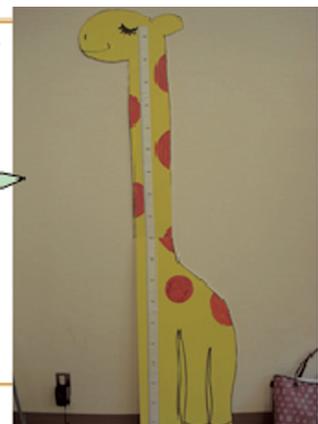
次に、実際に学生が在日外国人学校に訪問し、健康啓発プロジェクトを行った。プロジェクトの趣旨を子どもたちに理解してもらえるようにオリエンテーションを行い、その後身長計や体組成計の測定を行い、結果をノートに記録する方法を説明するという流れで行った。

パンフレット—イキイキ健康ライフ!!—



キリンの身長計

高さ2m！
高校生の子どもたちでも測れる大きさ



導入の様子



オリエンテーションでは、プロジェクターを用いて、肥満の男の子が登場する紙芝居で何のために体組成計を使うのかを説明した。子どもたちはみんな笑顔で聞いてくれたので、興味を持っていたようだ。

右の写真は実際に体組成計を使って測定している様子である。測っている女の子の左にいる子どもが笑顔で見守っているのがわかる。ここから体組成計に対して「私も早く測りたい」といった意欲的なまなざしが見てとれる。また右の方で学生と子どもが指さしているものがローレル指数である。ローレル指数に関しては、理解してもらうのにかなり工夫が必要だと推測された。そこで、今回は、説明用のキットを用意した。

測定において、学生が作成したローレル指数表を用いて、ローレル指数の見方を示した。身長と体重のものさしをそれぞれ自分の数値のところにあてて、その2本のものさしが交差するところがローレル指数の位置であると説明していった。この表は学生がインターネットから抜粋した表だったが、学生が予想した数値を大幅に超える子どもがいた。こういった事態を予測できていなかったことは、反省事項である。

いくつかのグループに分けて測定を行ったので、測定していないグループの時間を有効活用するため、インフルエンザ予防の必要性の啓発を行った。学生が手洗い班・マスク班・妊婦班に分かれて子どもたちに予防法を説明した。

手洗い班では、石鹸で洗っていない時の手を光にかざすとバイキンが光る装置を使用した。子どもたちには、この装置を通して、無数のバイキンが付着していることがひと目でわかる。その後、手洗いの仕方を学生が指導し、再び光にかざし、石鹸できれいに洗う前の手と視覚的に比較できるように工夫した。またマス

マスク班—視覚で伝える教材作り—



測定の様子



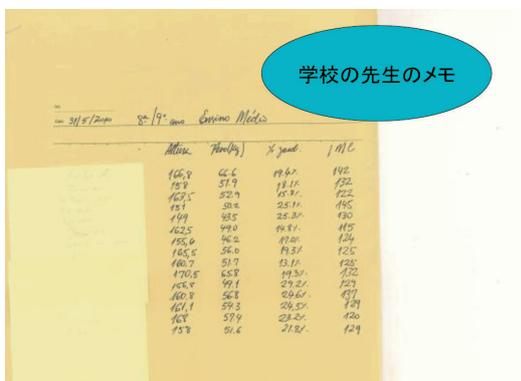
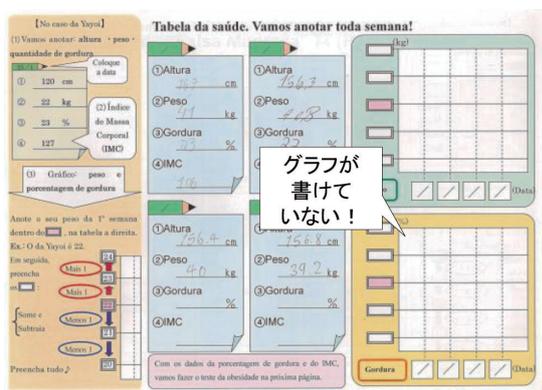
ク班では、マスクをつけると実際にどのような効果があるのかということ伝えるために、子どもたちが視覚的に理解できる教材を学生が作成した。

記録ノートの記入の場面が活動の中で一番難しかった。なぜなら、記録ノートは手順が複雑であり、書く作業が多いため、低年齢の子がどのくらい理解できるかわからなかったからである。

そのため、実施前に予め学校側に子どもに通訳を頼むことができるか相談し、通訳役の子どもを何人が確保した。そして学生が記録ノートの使い方について説明した後に、その子どもに通訳してもらうことで円滑に説明できるようにした。さらに上級生の子どもを通訳にすることで、お兄さんお姉さんが小さい子どもに教える環境を作った。学生が去った後も継続して測定が行えるように小さい子どもが先生よりも身近な存在であるお兄さんお姉さんと気軽に学校内で話し合えるような環境も作りたかった。

しかし、会場の大きさ等により、説明の声が聞こえず小さい子どもの集中力が切れてしまい、ノートの使い方がわからない子どもや意欲が下がってしまう子ど

記録ノート記入の様子



その際に、毎日できた項目にシールを貼る時は、間をあけずにつめて貼っていくことを子どもたちに伝えるようにした。

記録ノートについては実施1カ月後にいったん回収し、ノートの記入の仕方が正しいか、どのような結果が生じたのかを分析した。ここでは実際にある子どものノートを使って、説明したいと思う。

回収した記録ノートを見ると、身長や体重を書きこめた子どもは多かったが、グラフを書くことができない子どもが数多くいた。ある学校は先生が子どもたちを手伝い、全員グラフを完成させることができたといわれた。

左の写真は学校の先生のメモの一部である。このメモを提供してくれた学校は校長先生が今回のプロジェクトにとっても関心を持っているため、学校全体で意欲的に取り組んでくれた。参加人数も一番多かったことがわかった。このメモは後日回収したノートとは別に先生一人ひとりが受け持つ子どもの測定結果をまとめて資料として提供してくれたものである。この結果から教師の関心が高ければ高いほど、学校側で継続して健康問題に取り組みたいという思いが強くなるということがわかった。こうした学校にも今後も健康管理のサポートをしていき、最終的には子ども一人ひとりが自主的に取り組めるようにしていきたいと思う。

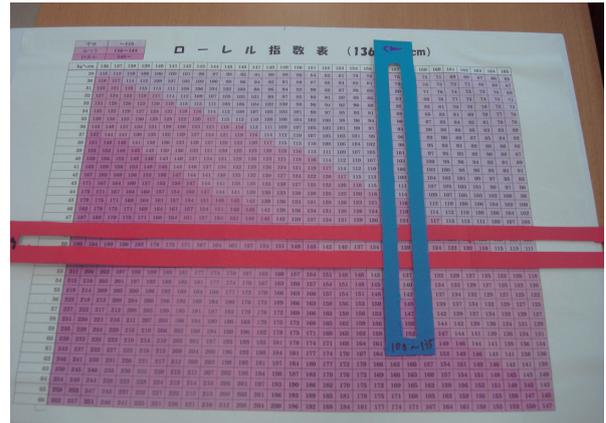
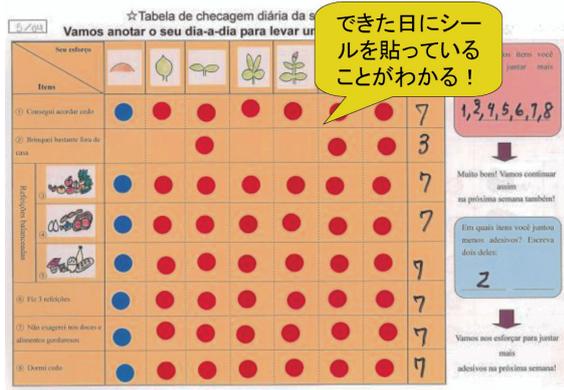
毎日できた項目にシールを貼るページでは、シールの貼り方を学生がよく説明したつもりだったが、多くの子どもが詰めずにシールを貼ってしまった。結果としては、いくつシールが貼れたかということに変わりはないが、学生が意図していた花とともに成長することは、伝わっていなかったということがわかった。

もが出た。また通訳担当の子どもとの連携が難しかった。そのため通訳してもらうのに理解が必要な内容については予め学校を訪問し、打ち合わせを行う必要があると感じた。

記録ノートの記入の仕方については、通訳担当の子どもを通して説明したが、子どもたちが視覚的に理解できるように、学生が説明のためのキットを作成した。記録ノートのページを拡大コピーし、マジックテープで数値を貼りつけたり、透明シートをかぶせたりして、記録した後どのような状態になるかを示していった。

3. 「伝わるように伝える」実践から得た示唆

子どもたちに指示・伝達しても思うように伝わらない。これは、教育実習中であっても、教員になっても、繰り返し直面する課題である。この課題に対して、この教育実践に参画した学生たちが得た最も大きな示唆は、子どもたちに「伝わるように伝える」には、教える側のもっている「あたりまえ」をいったん否定することであったと結論づけることができよう。学生たちが作業の過程で繰り返した、「こうすれば伝わるのでは



ないか」という仮説へのスクラップ・アンド・ビルドは、教材づくりのなかで何度となく繰り返されている。

そのなかで、学生たちが体験的に導き出していった方策は、いかに目で見てわかる教材を作成するか、であった。その成果を象徴する教材のひとつが、ローレル指数表である(右上写真)。子どもに自分の指数を確認させるための手順をどう説明するか。その説明で起こりうるさまざまな混乱と、その結果生まれるだろう子どもの取組意欲の低下は、学生たちにとって大きな不安となる。何とかそれを回避したいという思いが、ことばによる説明が十分ではなくてもやり方がわかる、「ひと目で伝わる」「ひと目でわかる」教材の開発につながっている。

さらに、その説明を要する場面を、複数通り想定し、学生たちは、個別にも全体にも対応できる枚数や大きさ、堅さや動かしやすさまで吟味していた。その結果のひとつとして採用された、赤・青マジックテープを使った誘導テープは、確実に子どもたちの注意を引き、正確な指数の確認を導き出すことに貢献していた。

記録にもあるように、この指数表には、日本の子どもの身長体重の上限推計値をもとに作られていた。ブラジル人の子どものなかにはそれを上回る子どもも少なからずいることを、学生たちは実践場面で気づくことになる。その気づきが次なる実践創出への試行錯誤につながる。

冒頭に示したように、「伝わるように伝える」教育実践のあり方を、教育者—学習者間の相互作用に探る教育実践研究は、十分に蓄積していない。その理由は、教員の持っている「あたりまえ」をいったん否定するという、ある種の勇気がある作業であることも一因となっているのかもしれない。あるいは、共通の言語を

持つがゆえに相互に伝わるはず、という前提を無意識のうちに教える側が持っていることが一因となっているのかもしれない。

今回の実践は、教員養成課程にある学生たちによる、日本語が通じない状況における実践で、学生たちにとっても、子どもたちにとっても使い慣れない用語や、教材教具の使用が前提となっていた。これらの要因が、子どもたちに「伝わるように伝える」実践を考えることに集中できる状況を生み出したと考えられる。こうした実践を教員養成段階で積み重ねることが、子どもに伝わるように伝え、結果として、教育内容への子どもの理解を促すことに貢献することにつながるのではないだろうか。

引用文献

- Bernstein, B. 1974, *Class, Codes, and Control. Vol.1 ; Theoretical Studies Towards a Sociology of Language*. 2nd edition, Routledge & Kegan Paul. 萩原元昭編訳 (1981) 『言語社会化論』 明治図書。
- 大黒孝文・稲垣成哲 (2006) 「中学校の理科授業における協同学習の導入とその学習効果の検討—ジョンソンらの協同学習論を手がかりとして—」, 日本理科教育学会 『理科教育研究』, vol.47, No.2, pp.1-12.
- 小川一美 (2011) 「対人コミュニケーションに関する実験的研究の動向と課題」, 日本教育心理学会 『教育心理学年報』 第50集, pp.187-198.
- 神戸大学附属住吉中学校 (2009) 『生徒と創る協同学習授業が変わる学びが変わる』, 明治図書。
- 佐藤学 1996, 『カリキュラムの批評—公共性の再構築へ—』 世織書房。
- Jackson, P. 1968, *Life in classrooms*. Holt, Rinehart & Winston.
- 杉江修治 2006, 「効果的な国語授業の事例的研究—伝え合いと

- ワークシート、自己評価の工夫を軸とした実践資料」中京大学教養部『中京大学教養論叢』vol.47, No.2, pp.353-392。
- 土江和世 2011, 「小学校外国語活動の充実に向けたカリキュラム開発(2)ーコミュニケーションの質を高める授業づくりー」奈良教育大学教職大学院研究紀要「学校教育実践研究」vol.3, pp.81-86。
- 長尾彰夫 1995, 「カリキュラムの編成原理をめぐるポリティックス」日本教育方法学会編『教育方法24 戦後教育方法研究を問い直すー日本教育方法学会30年の成果と課題ー』明治図書。
- 橋本理香 1999, 「コミュニケーション能力に関する一考察：伝え合う力の捉え方について」北海道教育大学『旭川実践教育研究』第3号, pp.123-129。
- 松浦均・近藤亜裕美 2011, 「協同学習グループ内のコミュニケーション行動について」『大学教育研究ー三重大学授業研究交流誌ー』三重大学共通教育センター, 19号, 27-34頁。
- 松下佳代 2000, 「『学習のカリキュラム』と『教育のカリキュラム』」グループ・ディダクティカ編『学びのためのカリキュラム編』勁草書房。
- 結城恵(編著) 2010, 平成21年度文部科学省受託研究『外国人教育に関する調査研究』委託研究報告書ーブラジル人学校等における健康管理の在り方』研究代表者 結城恵。

注

この報告は、本事業に参加した学生を代表して、河内亜沙美(平成22年度卒、英語専攻)、三添愛実(平成22年度卒、社会専攻)、スザナ・ハラ(平成21年度卒Jプログラム日本語・日本文化研修留学生)がまとめたものを一部加筆修正したものである。

(ゆうき めぐみ)

